明治座評

（明治二十九年四月）

三木竹二

青空文庫

明治座の一番目「明智光俊誉乗切」は三幕にて、山崎合戦より唐崎の馬別れに終る。例の通「真書太閤記」も一二節に芝居の衣をかけしまでにて、かたりに記せる修羅場の読切といへるには適すれども、むづかしき戯曲論など担ぎ出すべきものに非ず。しかし光俊を見するなら、坂本の宝物渡しまで見すれば少しは筋が通れど、馬別れだけでは喰ひ足りずとは女子供までが申すなり。

序幕山崎街道立場の場は明智の雑兵の乱暴を羽柴の侍が制する処なるが合戦中の事としては、百姓が長閑気に酒を呑み女に戯るるなど無理なる筋多し。光秀陣中の場は光秀が死を決して斎藤大八郎の諫を用ゐぬ処なるが、ここも双方共あまり先を見通し過ぎて実らしからず。小栗栖村一揆の場は明智の落足を見する処なれど、光秀の代に溝尾が出るまでなれば殆無用に属す。

二幕目丹吾兵衛住家の場は光俊戦場を逃れて旧明智の臣なる漁師丹吾兵衛を訪ひて、そこにかくまはれし明智の妾菖蒲の方に明智の系図を渡す処なり。ここは時代中の世話場にて、「布引滝」九郎助住家の俤あり。入江長兵衛が光俊を討たんため贋狐憑となりて入込み、光俊が武士をやめむといひて菖蒲の方の打擲に逢ふなど在来の筋なり。物語や立廻りの都合はあれど、光俊がこのいそがしい中で一旦鎧を脱ぎてまた切にこれを着するは想像せられぬことなり。

三幕目湖水乗切の場は一幕とするほどの者でなきゆゑ、自然光俊が泣過ぎねばならぬ様になるはせんかたなし。何にせよ一番目中にて、これがこの世のといふ白を三度使ふにても、この狂言の面白きを察すべし。即ち光秀と大八郎、光俊と半次郎、光俊と菖蒲の方なり。また本陣の光秀と丹吾宅の光俊が、出陣なさんといふも可笑し。

市蔵の明智光秀は大志あれども徳望なき大将と見えたり。丹吾兵衛は篤実なる老人と受取らる。

小団次の斎藤大八郎、諫言の押手利きで、光秀と気味合の別れも応へたり。菊之助の長兵衛は難役を味好くこなしたれど、人品が好すぎたり。栄三郎の同女房もよし。秀調の菖蒲の方は楽にして居たり。福助の光俊臣林半次郎は御苦労なり。

菊五郎の光俊は惣髪にて、金の新月の前立物ある二谷といふ兜を負ひ、紺糸縅の鎧、お約束の雲竜の陣羽織にて立派なり。人物も光俊は綿密家にてよく何事にも行届きし人の様に思はるる故、其所には箍りたり。物語は立派にて、心底を明さぬ件も光俊の品位を保ちてよし。乗切を見せぬは利口物なり。馬を撫恤る処にて、平手にて舌をこきてやり、次に葦を抜いて馬の毛をこくなどいふ通をやりしは好し。馬別れもあつけなきものをあれほどにこなしたるは先づ好し。この場の馬は人間を使はぬ故、足の工合など好く出来、口の内なども旨く拵へたり。

中幕「和歌徳雨乞小町」は一幕なり。名は筋を顕すとはこれ等をやいふならん。芝居にならぬものを芝居にするのは作者に非ず、福助に非ず、けだし簀の子にて薬火を燃す男なるべし。それ故にこそ電火一閃するごとに拍手湧くが如きなれ。ただ小町の詞に和歌のために一命を捨つるは憾なしとあるは利きたり。

福助の小町は女なれども道のために身を捧げて毫も惜むことなく凛として動かすべからざる気概見えて頗る好し。

松助の大友左衛門、翫太郎の荒巻耳四郎は共に小町の雨乞を妨ぐる敵役なるが、拵古風にて好し。

秀調の針妙水無瀬は小町の難義を救ふ役なるが、作者が性の知れぬものを拵へしため、奴小万が戸迷ひをしたといふ形あり。

二番目「新皿屋敷朧雨暈」は黙阿弥の作にて、「播州皿屋敷」を世話に翻案し、肴屋の酒乱を加へたるものなるが、妙は前半にあらずして却りて後半に存ず。

序幕芝神明桜茶屋の場は磯部家用人岩上典蔵が主家を乱さんと謀る筋を利かす。磯部邸弁天堂の場は愛妾お蔦が典蔵に挑まれて難義せるを浦戸紋三郎に救はれしが、折から弁天堂の灯籠の消えしため、典蔵に不義者なりと呼びかけらるる処なるが、原本に比すればやや理に適へり。

二幕目お蔦部屋はお蔦が不義の疑を受けて召仕に遺物分けする処なるが、冗漫なれば今回の如く除きし方よし。

三幕目庭前古井戸の場はお蔦が不義の疑と、殿より預りし磯部家の重宝井戸の茶碗を典蔵盗み出して破壊し、その罪をお蔦に帰したるとに因り、酒乱の磯部主計之助の怒強く、拷問の上なぶり殺になる処なり。ここが原本には眼目の見せ場なるが、実に残酷の絶頂に達せるものにて、一睨みごとに手を拍つて喜ぶ見物すら下を向いて見ぬ位なれば、いくら出したくても出せなくなるは今の間なり。

四幕目紋三郎宅の場は紋三郎が汚名を被り自殺せんとするをお蔦の亡霊出でて留め、悪人の密書を渡す処なり。

五幕目芝片門前魚屋の場はお蔦の兄惣五郎がお蔦の死を歎き、気晴しにとて禁酒を破りて飲みし酒に酒乱となり、磯部の邸に暴れに行くといふ処、

六幕目磯部邸玄関の場は惣五郎が殿の非道を罵りて暴れ廻る処、庭先は惣五郎の酒醒めて後悔せるとき主計之助出でその罪を謝する処、神明祭礼の場は紋三郎が典蔵を縛する処なり。作者が初め父太兵衛の口より平常はかういふ家業の者にも似合はず理窟をいつて尤もらしいが、酒を飲むと人の見界がなくなるから禁酒をさせ居るといふ筋を利かせ、さて禁酒を破る筋にも無理がなく、湯呑で一杯から二杯、三杯と増し、遂に片口から二升樽と段々に無法になる作り方好し。磯部の玄関にて生酔本性違はぬ処を示し、吾太夫を足蹴にするも面白し。酒醒めし件にてひどく恐入らせ、ここへ詫に出る主計之助がやはり酒乱にて誤をなせりといふも照応して好し。もとより酔中の動作は菊五郎の腕にあれど、これを菊五郎に箝めて書いてやりたる作者も大に賞揚せざるべからず。けだし「魚屋宗五郎」は「幡随長兵衛」などと共に黙阿弥傑作の一に数へて、後世に伝ふるに足るべし。

小団次の磯部主計之助は相応にこなしたれど、書卸しの我童に及ばず。三吉は新蔵より役者のよきだけの事なし。

市蔵の家老浦戸十左衛門はしつとりして、璃寛の比に非ず。

菊之助の紋三郎は生真面目にて、我童の色気ありしに優れり。

栄三郎の召仕おなぎは部屋がなき故損な役廻りとなりたれど、松之助に劣らず。

松助の典蔵は先年通り極めて好く、太兵衛はべらんめえ気質ありて寿美蔵より遥に好し。蟹十郎の吾太夫は寿美蔵の師匠張より見好きも、貫目に乏しく、翫太郎の道庵は適役にて好し。小由の桜茶屋女房は松之助の俤あれど、つんけんし過ぎたり。

秀調の宗五郎女房は国太郎と伯仲の間にあり。

菊五郎のお蔦、両吟の唄にて花道の出は目の醒むるほど美しく、今度は丸髷にて被布を着られしためもあらんが、容貌は先年より立

優れり。典蔵に挑まれてびつくりしながら、愛敬を捨てず体よく断る処いかにも好し。気がつきて水を呑むとき両手で柄杓を押へ、首を持つていく工合真に逼り、白紙を出して髷を撫付くるも女の情にて受けたり。斯様な色気のあるものになりては福助も及ばず、半四郎後一人なるべし。

　宗五郎はいつもの大いなせでなく、堅気な道理の解つた男といふ腹ありて、親の腹立をなだめ「虫を殺して居ますのさ」といふ処応へたり。おなぎの話を聞て黙つて涙を拭いて居り、だしぬけに「一杯ついでくれ」と湯呑を出し、それから何の彼の理窟をつけては飲む処面白し。段々調子が荒つぽくなり、おなぎが留むると「飲ませねえ酒を何故持つて来た」とくつてかかる工合もよし。これから往く所があると偏袒となり、着物の前をはだけ、酒樽をもつて暴れ出し、玄関にて仲間どもを相手に打合ふ間、頭のぎりぎりより足の爪先まで生酔ならぬ所なく、一挙手一投足もむだのなきは恐れ入つたものなり。吾太夫を足蹴にする処も、重左衛門に理窟をいふ処も性がある様でない様な工合実に妙なり。理窟をいふ間で手を叩いて大きく笑つたり、説諭を聞く間で生欠伸をしてこくりこくりと居睡をするも好し。酒が醒めて恐入る体も面白く、殿様の詫に心解け、空に向ひてお蔦を呼かけ「浮んでくれろ」といふ処は泣かせたり。

（明治二十九年四月二十四日見物）

青空文庫情報

底本：「観劇偶評」岩波文庫、岩波書店
　　2004（平成16）年6月16日第1刷発行
底本の親本：「めさまし草　巻四」
　　1896（明治29）年4月発行
初出：「めさまし草　巻四」
　　1896（明治29）年4月発行
※初出時の表題は「芋あらひ」です。
※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。
※文中のセリフ、および竹本の詞章などのカギカッコは底本の編者（渡辺保）によります。改行、冒頭の作品名、作品評における場割、芸評における俳優名・役名の太字は編者によります。
入力：川山隆
校正：門田裕志
2011年3月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治座評

（明治二十九年四月）

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　三木竹二
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/